

第五章 滿洲問題ニ關スル日露交渉

日露交渉ニ關スル我提議ト協商基礎案

露國ハ第一期ノ滿洲撤兵後毫モ條約ヲ勵行スル意思カ無イ様ニ見エルノミナラス、清國ニ對シテハ更ニ新
タナ要求ヲ提出シ、韓國々境地方ニ於ケル行動ハ益々活氣ヲ呈シテ來タカラ、我國ハ何時マテモ之レヲ座視
スルコトカ出來ヌ、小村外相ハ栗野公使ニ電訓シ、同公使ハ左ノ口上書ヲ明治三十六年七月三十一日露國外
務大臣ニ提出シタ。

日本政府ハ日露兩國ノ關係上凡ソ將來誤解ノ原因タルヘキモノヲ一掃セムコトヲ希望シ、露國政府モ亦之
レト同感ナルヘシト信ス、是ヲ以テ茲ニ極東ニ於ケル兩國各自ノ特殊利益ヲ劃定スルヲ期シ、露國政府ト
共ニ兩者利益ノ接觸スル方面ニ於ケル事態ヲ查覈スルハ日本政府ノ喜フ所ナリ。

若シ此案ニシテ幸ニ大體ニ於テ露國政府ノ贊同ヲ得ハ、日本政府ハ右協商ノ性質及範圍ニ關シ、其意見ヲ
露國政府ニ提出スル所アラムトス。

此口上書モ亦其後交渉ノ重要書類モ、前ニ記シタ如ク日露開戰ノ直後ニ公表サレタ「日露交渉ニ關スル往
復」中ニ掲載サレテハ居ルカ、此資料丈ケテハ當時ノ事情ヲ闡明スルノニ相當困難タト思フカラ、露國ノ滿
洲政策ト對照シテ、我國ノ主張乃至要求ノ依ツテ基ク所ヲ釋說シタイト思フ。

「ラムズドルフ」伯ハ八月五日右口上書ニ關シ商議ヲ開始スルノ允許ヲ得タコトヲ栗野公使ニ回答シタノ
テ、同公使ハ同月十二日左ノ協商基礎案ヲ政府ノ訓令トシテ公然提出シタ。

第一條 清韓兩帝國ノ獨立及領土保全ヲ尊重スルコト、並ニ該兩國ニ於ケル各國ノ商工業ノ爲機會均等ノ
主義ヲ保持スヘキ事ヲ相互ニ約スコト。

第二條 露國ハ韓國ニ於ケル日本ノ優勢ナル利益ヲ承認シ、日本ハ滿洲ニ於ケル鐵道經營ニ就キ露國ノ特
殊ナル利益ヲ承認シ、併セテ本協約第一條規定ノ下ニ右劃定セラレタル兩國各自ノ利益ヲ保護スルカ
爲必要ナル措置ヲ、日本ハ韓國ニ於テ、露國ハ滿洲ニ於テ執ルノ權利ヲ相互ニ承認スルコト。

第三條 日露兩國ハ本協定第一條ノ條項ト背馳セサル限り、韓國ニ於ケル日本及滿洲ニ於ケル露國ノ商業
的及工業的活動ノ發達ヲ阻礙セサルヘキコトヲ相互ニ約スルコト。

又今後韓國鐵道ヲ滿洲南部ニ延長シ、以テ東清鐵道及山海關牛莊線ニ接續セシメントスルコトアル
モ、之レヲ阻礙セサルヘキコトヲ露國ニ於テ約スルコト。

第四條 本協約第二條ニ掲ケタル利益ヲ保護スルノ目的又ハ國際紛爭ヲ起スヘキ叛亂若クハ騷擾ヲ鎮定ス
ルノ目的ヲ以テ、日本ヨリ韓國ニ或ハ露國ヨリ滿洲ニ軍隊派遣ノ必要ヲ見ルニ於テハ、其派遣ノ軍隊
ハ如何ナル場合ニ於テモ實際必要ナル員數ヲ超ユルヘカラサルコト、且右軍隊ハ其任務ヲ果シ次第直
チニ召還スヘキコトヲ相互ニ約スルコト。

第五條 韓國ニ於ケル改革及善政ノ爲助言及援助（但シ必要ナル軍事上ノ援助ヲ包含スルコト）ヲ與フル

ハ、日本ノ專權ニ屬スルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト。

第六條 本協約ハ從前韓國ニ關シテ日露兩國間ニ結ハレタル總ヘテノ協定ニ代ルヘキコト。

此協定案ノ大綱ハ既ニ六月二十三日ノ御前會議ヲ決定サレタモノテ伊藤侯其他諸元老ノ贊同ヲ得タノテアルカ、前年栗野公使私案ノ体裁ヲ提出サセ様トシタ外務省案ト、根本ニ於テ差異ハナイ。

滿洲撤兵ニ關聯スル露國ノ對清要求

我國カ此協約案ヲ公然露國ニ出ス決心ヲシタ動機ハ此年（明治三十六年）ノ四月十八日ニ在清露國公使カ左記要領ノ要求ヲ清國ニ提出シタカラテアル。

露國ハ支那ト二百餘年ニ亘ル長キ友誼關係ニ在リ、兩國ノ國境ハ非常ニ長ク、其利害關係ハ頗ル複雑ナル所、兩國ハ親善關係ヲ持續スルヲ要シ、之レカ爲第三國ノ容喙ヲ許ス可ラス。殊ニ滿洲ニ關シ露國ハ其廣大ナル地域ノ治安ノ爲數百萬ノ金錢ヲ費シ、又國民ノ利益ノ爲ニ非常ノ費用ヲ掛けテ長キ鐵道ヲ敷設セルカ他國ハ一錢タモ支拂ハス、又治安ノ爲一兵卒ヲモ犠牲トセス。故ニ露國ハ斯クノ如キ巨多ノ出捐ニ依リテ獲タル大ナル利益ヲ保護スル完全ノ權利アルコトヲ信スルト同時ニ、各國ハ露國カ資本ト武力トニ依リテ獲タル塔物ヲ適法ノ征服權ニ基クモノト思惟セサルヘカラス。然ルニ露國ハ征服權ト云フカ如キ主張ヲ毫末モ爲ス事ナク、光緒七年既ニ伊犁ヲ、昨年ハ又盛京省ノ西南部ヲ返還セリ。而シテ今ヤ盛京省ノ殘部ト吉林省及營口ヲ還附セントス。若シ清國ニシテ露國ニ眞摯ナルニ於テハ、露國ノ正當ノ利益ニ干渉セサ

ルヘク、左記條件ニ同意スルヲ疑ハス。

一、清國政府ニ還附セラルヘキ地方ノ如何ナル部分、殊ニ營口及遼河ノ谿谷ハ、如何ナル場合ニモ他國ニ租與又ハ賣渡サレサルヘシ。斯クノ如キ租與又ハ賣渡ハ露國ニ對セル脅害ト看做サルヘク、露國ハ其利益保護ノ爲決定的手段ヲ執ルヘシ。

二、蒙古ニ於ケル現制度ノ變更ハ擾亂ノ基タルヘキニ付之レヲ變更セサルコト。

三、清國政府ハ露國ニ豫メ通告セスシテ滿洲ノ都市港灣ヲ自儘ニ開放シ、若ハ右都市港灣ニ各國領事ノ駐在ヲ認許セサルヘキコト。

四、清國カ如何ナル事項ノ管理行政ニ各國人ヲ雇傭スルモ、其權限ハ北清（直隸省ヲ含ム）ニ於ケル事項ニ及ハサルヘキコト、北清ニ於テハ露國ノ利益優越スル故、清國若シ北清ニ於ケル各事項ノ行政管理ニ外國人ヲ雇傭スルヲ希望スル場合ニハ、露國ノ監督下ニ特別ノ職員設ケラルヘキコト、例ヘハ清國若シ鑛業ニ關シ外國人ヲ雇傭スル場合、右外國人ハ蒙古又滿洲ノ鑛業ニ無權限ニシテ、此等地方ノ鑛業ハ全然露國専門家ニ委嘱セラルルカ如シ。

五、露國ハ電信線ヲ營口、旅順口及全盛京省ニ有スルニ依リ、右電信線ヲ營口北京間ノ支那線ニ接續スルヲ最モ重要ト思考ス。故ニ右電信線存在中ハ營口北京線ハ存置セラルヘキコト。

六、營口海關收入ハ現在通り清國海關官憲ニ引渡サレタル後、露清銀行ニ預金セラルヘキコト。

七、占領中滿洲ニ於テ露國臣民及外國會社カ正當ニ獲得シタル諸權利ハ撤兵後モ完全ニ存續スヘシ。加之

鐵道通過全地方ノ人民ノ生命ヲ保護スルハ露國ノ義務ナルニ付、鐵道ニテ旅客又ハ貨物移送ノ結果北清ニ傳染病ノ蔓延スルヲ豫防スル爲、同地方ヲ清國ニ還附後營口ニ檢疫所ヲ設クル必要アリ。露國行政管理官ハ此目的ヲ達スル爲最善ノ手段ヲ盡スヘシ。税關主事及税關醫務官ニハ露國人ヲ使用シ、總稅務司ノ監督下ニ置カルヘシ。露國人以外ノ外國人ハ同一港ニテ雇傭セラレサルヘシ。右ノ外常設衛生局ヲ設ケ、局長ハ海關道臺トシ、參事會員ハ外國領事、税關主事、税關醫務官及東清鐵道代表者ニテ組織セララルモノトス。

露國政府ハ以上ノ諸件ニ依リ充分露國ノ利益ト人民ノ生命トヲ保護シ得ヘシト信ス。右條件ヲ清國皇帝ニ於テ承認セラレシコトヲ清國政府ヨリ回答アラハ、之レヲ接受次第露國軍隊ハ盛京省及吉林省ヨリ撤退スヘク、露國民政官ハ營口ヲ清國道臺ニ引渡スヘシ。

此露國要求ハ滿洲還附條約締結前露國力清國ニ提出シタ條件ヨリモ幾層倍力加重シテ居テ、若シ此提議ヲ清國カ聞ケハ露國ハ滿洲ノ實權ヲ掌握スルコト成ルノテアルカラ、我國ハ勿論英米モ亦斷然之レヲ拒絕スル様支那ニ勸告シタカ、支那自身トシテモ斯ノ如キ申入ヲ抗議セスニハ居ラレナカツタ。

日露交渉ノ談判地

我協約案ヲ受取ツタ露國外務大臣ハ、篤ト之レヲ研究シ様ト答ヘタ儘、旬日ニ及フモ何等ノ意見モ述ヘス故、其速答ヲ求メタラ、此問題ニ付テハ「アレキシエフ」大將ニ移牒スヘキ事柄モ多イト考ヘルカラ、豫備

商議ハ東京ニ移シ追テ露都テ之レヲ確定シ度イト思フトノ答ヘタ。然シ我提案中ニハ地方的知識ヲ要スルカ如キ細目ノ事項ハ少シモ無イノミナラス。此ノ如クスル時ハ只徒ラニ時間ヲ費シ、其他我ニ害アルモ益ナキハ明カ故、帝國政府ハ飽迄露京ヲ談判ヲ繼續センコトヲ主張シ、同時ニ主義上我提案ヲ商議ノ基礎トセンコトヲ何回モ繰返シテ要求シタカ、「ラムスドルフ」伯ハ露帝ノ外遊等ヲ口實トシテ談判地移轉ノ意見ヲ固持シ、露國ノ對案ハ在京露國公使ヲ經テ小村外相ニ提出スルカラ彼我兩案ヲ談判ノ基礎トセンコトヲ主張シテ譲ラス。

露國ノ滿洲政策

事新シク述ヘル迄モ無ク露國ノ滿洲政策ニハ硬軟兩派カ在リ、硬派即チ武斷派ノ中堅ハ「アレキシエフ」大將テ、「ベヅブラゾフ」「アバザ」等カ彼ヲ取卷イテ私腹ヲ肥ヤソウト目論ンテ居ル、之レニ對スル軟派（軟派ト云フテハ語弊カ在ルカ）即チ穩健派ハ「ラムスドルフ」外相「ウキツ」藏相ヲ中心トシテ、兩派ノ勢力ニハ自ラ消長カ在ツタ、明治三十四年ノ露國對清提案カ其儘立消ト成リ、滿洲還附條約カ締結セラレ、又第一期撤兵ノ實行サレタノハ穩健派ノ意見カ勝ツタ證據テ、其後撤兵カ行ハレス條約履行ノ對償トシテ前掲四月ノ提議カ爲サルニ至ツタノハ即チ武斷派カ勢力ヲ得タ爲テアルカ、明治三十六年ノ七月中旬ニ鴨綠江木材會社ノ問題ヲ御前會議カ露國ニ開カレタ時、「ラムスドルフ」伯ノ意見ハ無慙ニ否決サレタノテ、同伯ハ辭職スルト云ヒ出シ漸ク其意見ヲ通シタトノコトタ。然シ八月十二日ニハ「ラムスドルフ」ヤ「ウキツ

テ」ニ諮詢セスニ極東總督令カ公布セラレ、「アレキシエフ」大將カ同總督ニ任命セラレ、極東ノ事柄ハ外交ニ至ル迄總テ同總督ノ意見ヲ待ツ様ニ成リ、從ツテ我提議ニ對スル露國對案ノ起草モ同總督力在本邦「ローゼン」公使ト協議シテ之レヲ起草スル様ニトノ勅令カ下リ、八月中旬ニハ「ウキツテ」氏ハ大藏大臣ヲ辭職シタ。「ラムスドルフ」伯カ談判地ヲ東京ニ移サント申込ミ、又露國對案カ「ローゼン」公使カラ小村外相ニ渡サレタノハ全ク此間ノ消息ヲ語ルモノテ、穩健派ノ閉息、武斷派ノ活躍ヲ示スニ外ナラヌカ、此武斷派ノ跳梁ハ終ニ日露ノ妥協ヲ不可能ナラシメ、干戈相參見ユルノ不幸事ヲ招致シタノテ在ル。

我協商基礎案ニ對スル露國ノ對案

扱テ「ローゼン」公使ハ露國對案作成ノ爲「アレキシエフ」總督ヲ訪問スルトテ明治三十六年九月二十二日旅順ニ向ケ出發シタカ、十月三日歸京即日小村外務大臣ヲ訪問シテ左ノ對案ヲ提出シタ。

第一條 韓帝國ノ獨立並ニ領土保全ヲ尊重スルコトヲ相互ニ約スルコト。

第二條 露國ハ韓國ニ於ケル日本ノ優越ナル利益ヲ承認シ、並ニ第一條ノ規定ニ背反スルコトナクシテ韓國ノ民政ヲ改良スヘキ助言及援助ヲ同國ニ與フルハ日本ノ權利タル事ヲ承認スルコト。

第三條 韓國ニ於ケル日本ノ商業的及工業的企業ヲ阻礙セサルヘキコト、及第一條ノ規定ニ背反セサル限リ右企業ヲ保護スルカ爲ニ採ラレタル總テノ措置ニ反對セサルヘキコトヲ露國ニ於テ約スルコト。

第四條 露國ニ知照ノ上、右同一ノ目的ヲ以テ韓國ニ軍隊ヲ送遣スルハ日本ノ權利タルコトヲ露國ニ於テ

承認スルコト。但シ右軍隊ノ員數ハ實際必要ナルモノヲ超過セサルヘキコト。且右軍隊ハ其任務ヲ果シ次第直チニ召還スヘキコトヲ日本ニ於テ約スルコト。

第五條 韓國領土ノ一部タリトモ軍路上ノ目的ニ使用セサルコト。及朝鮮海峽ノ自由航行ヲ迫害シ得ヘキ兵要工事ヲ韓國沿岸ニ設ケサルヘキコトヲ相互ニ約スルコト。

第六條 韓國領土ニシテ北緯三十九度以北ニ在ル部分ハ中立地帶ト看做シ、兩締約國孰レモ之レニ軍隊ヲ引キ入レサルヘキ事ヲ相互ニ約スルコト。

第七條 滿洲及其沿岸ハ全然日本ノ利益範圍外ナルコトヲ日本ニ於テ承認スルコト。

第八條 本協約ハ從前韓國ニ關シテ日露兩國間ニ結ハレタル總テノ協定ニ代ルヘキコト。

露國ノ對清新要求

之レニ對スル我國ノ折衝振リハ後ニ記スコトトシテ、露國ハ九月六日此年四月ニ提出セシ要求ニ替エ左ノ如キ新タナ申込ヲ清國ニ爲シタ。

露國ハ下ノ條件ニテ滿洲ヲ清國ニ返還シ、其軍隊ヲ撤退スルニ同意ス。

一、盛京省即チ營口、鳳凰城、沙開子、遼陽ニ於ケル軍隊ハ直チニ撤退サルヘシ。

二、吉林省即チ吉林城、伊通水、寬城子、沒沙子、它賴柏ニ於ケル軍隊ハ四個月以內ニ撤退サルヘシ。

三、吉林省即チ寧古塔、阿什開ニ於ケル軍隊並ニ黑龍江省即齊々哈爾、海拉爾ニ於ケル軍隊ハ一年以內ニ

撤退セラルヘシ。

右ニ對シ露國ハ左ノ要求ヲ爲ス。

一、清國ハ以上三省ノ如何ナル部分ヲモ、假令租與、質入其他何等ノ形式ニ依ルヲ問ハス、決シテ他國ニ引渡ササルヘシ。

二、松花江ノ航路及齊々哈爾、麥爾根、「ブラゴエスチンスク」ノ往還ハ、清國政府カ均シク大ナル利害ヲ有スル清國鐵道ニ滿洲ノ諸地方ヨリ貨物ノ到達ヲ容易ニスル爲殊ニ重要ナルニ付、松花江沿岸ノ各地ニ倉庫ヲ築キ、江上船舶及沿江電信線保護ノ爲ニ必要ナル軍隊ヲ同地ニ屯駐セシメ、貨物積下ロシノ安全ヲ保護スヘシ。露國ハ又齊々哈爾、麥爾根及「ブラゴエスチンスク」間ノ道路ニ沿ヒ各要地ニ軍隊駐屯所ヲ設クヘシ。

三、鐵道ニテ輸送セラルル貨物ニ特殊ノ重稅ヲ課ス可ラス。鐵道ニテ滿洲ニ輸送セラルル貨物ニ對スル課稅ハ道路又ハ河江ニ依リ輸送セラルル貨物ヨリモ重カラサルヘシ。

四、露國軍隊撤退後露清銀行ノ滿洲各地支店ハ滿洲將軍ノ軍隊ニ依リテ保護セラルヘク、右軍隊ノ費用ハ銀行ヨリ支出セラルヘシ。

五、營口ヨリ傳染病ノ入り來ルヲ防ク爲、清國ハ上海及天津ノ如キ開港ニテ採用セラルル規則ニ基キ、必要ナル手段ヲ採ルヘク露國亦東清鐵道所屬ノ該地方ニ必要ナル手段ヲ講スヘシ。露清兩國官憲カ此目的ノ爲ニ採ル手段ヲ協調スル爲、道臺ハ此等豫防手段ヲ命スル各地ニ露國醫務官ヲ任用スヘシ。

之ニ對スル清國ノ態度ト列國

以上ノ外「外國ニ許セラレシ各種權利ハ露國ニモ亦均シク與ヘラルヘシ」トノ一項モ在ツタカ餘リニ過キテ居ルト云フノテ清國之レヲ聞キ容レナカツタニ拘ラス、前掲諸項ハ左程テモ無イカラ之レヲ承諾シテ、一刻モ早ク撤兵ヲ完了セシメ様トスル模様カ清國當局間ニ見エタノテ、我國ハ右ノ諸項カ甚タシク清國ノ主權ヲ侵害シ又他國ノ條約上ノ權利ヲ無視スルモノテアルコトヲ指摘シ清國若シ我國ノ意見ニ聽カス承諾スル様ナコトカアレハ、清國ハ其全部ノ責任ヲ負ハネハナラヌト警告シ、慶郡王カラ清國ハ日本ノ同意ナクシテ露國ト如何ナル協定ヲモ結ハヌト云フ確答ヲ取付ケタカ、露國ノ新要求ニ對シ清國側ヨリ相談ヲ受ケタ米國公使ハ矢張り之レヲ拒絕スル様勸告シ、露國カ條約ニ定メタ撤兵ヲ完了シタ後テナケレハ如何ナル商議ニモ應セヌ様慶郡王ニ勸メタ。然ルニ露國公使ハ滿洲ニ於ケル森林、鑛山其他ノ利權ニ付九月二十二日更ニ新タナ要求ヲ清國ニ爲シタノテ、清國政府ノ強硬決意ヲ促ス爲英國公使カ慶郡王ニ會見シタラ、清國ハ露國各種ノ要求ヲ拒絕シ、如何ナル合理的ノ要求ヲモ條約ニ定メタ撤兵完了前ニハ相談ニ乘ラヌト露國公使ニ通告シタトノコトヲ同親王カラ聞テ、其態度ノ適正ナルヲ賞讃シタト傳聞シテ居ル。元來露國カ右ノ如キ要求ヲ頻リニ提出スルノハ、滿洲還附條約テ定メタ第三期ノ撤兵期カ此年ノ十月八日ニ滿了スルカラ之レト關聯シテ豺狼ノ慾ヲ達セント期スルニ外ナラヌノテ、十月初旬清國政府ハ人ヲ露國公使ノ許ニ送り、期日ニハ撤兵完了スルヤヲ問ヒ合サセタ所、露國公使ハ却テ清國カ露國ノ要求ニ應スルヤ否ヤヲ反問シ、此問題ハ撤兵完了

後ニ非サレハ商議ニ入ル能ハストノ答ヲ得テ然ラハ露國ハ十月八日ニ撤兵スルヲ得スト返事シタトノコトヲ。

露人ノ龍岩浦占居

斯クノ如クシテ露國ハ其兵ヲ滿洲ヨリ撤退セサルノミナラス、益々滿洲略取ノ意圖ヲ露骨ニ表シテ來タカ、韓國方面ニモ亦着々トシテ手ヲ擴ゲ、明治三十六年五月初旬數名ノ露國人ハ鴨綠江口ノ一港龍岩浦ニ馬賊中ヨリ募集シタ百名近クノ支那人ヲ伴レテ移住シ彼等露人ハ、最近設立サレタ木材會社ノ商人タト自稱シテ居ルケレト、其實軍人ヲ旅順ノ露國官憲ノ命令下ニ行動シテ居ルモノト考ヘラレタカラ、韓國政府ハ屢々抗議シタカ少シモ利目ナク、彼等ハ道路ヲ修理シ家屋ヲ建築シ、大東溝及安東縣トノ交通ノ爲メニ小蒸汽船ヲ浮ヘ、安東縣ニハ電信線迄モ架設シタ。在韓國國公使ハ其行動ヲ支持スル爲、明治二十九年韓國王カ露國公使館遁走中ニ與ヘタ森林利權ヲ援用シ、韓國政府ヨリ其不當ナコトヲ説明シテモ聽キ容レヌ故、遂ニ七月初旬地方官憲ニ命シテ大東溝ヲ連結スル電信線ヲ取毀サセタカ、露人ハ韓國側ノ抗議ヲ馬耳東風ト聞流シ毫モ意ニ介セス、韓國官吏亦彼等ト龍岩浦租借ニ關スル豫備協定ヲ結ンタ。之レハ明治三十六年七月二十三日ノ事テ、其要領ハ左ノ通りテアル。

- 一、龍岩浦ノ租借許可、但シ同地域ノ範圍ハ韓露間ニ協議決定セラルヘキコト。
- 二、毎年ノ納付金。
- 三、墓地移轉ノ許可。

四、韓國人租借域内ニテ罪ヲ犯セル場合ハ處罰ノ爲之レヲ韓國地方官憲ニ引渡スヘク、外國人タル犯罪者ハ總テ露國會社ニ引渡サルヘキコト。

五、鴨綠江上流ヨリ來ル木材ヲ購フ場合ニハ、露國會社ハ市價ヲ支拂フコト。

右豫備協定成立ノ報ニ接シタ帝國政府ハ、八月十三日在韓公使ニ訓令シ、森林利權ハ伐木ノ爲私設會社ノ設立ヲ露國臣民ニ與ヘタノニ過キヌ所、龍岩浦ニ於ケル現在ノ露國企業ハ私的企業ニ非スシテ政府事業タルト同時ニ、其遣リ方ハ利權條規ト韓國主權トヲ無視ス又露人ニ龍岩浦ヲ租與シ、同地ヨリ木材ノ輸出ヲ許シ、同地ニ彼等ノ需要品ノ輸入ヲ許スハ、事實上同地ヲ通商ノ爲ニ開クモノニシテ、若シ同地ノ重要地區悉ク露人ニ租與セラルルニ於テハ、他ノ條約國ハ均等權ヨリ排除セラルルコトナルヘク、殊ニ在韓外國人ヲ露國官憲ニ引渡スカ如キハ明カナル條約違反故、豫備協定ハ斷シテ之レヲ承認スヘカラスト韓國政府ニ警告セシメ、該協定ハ遂ニ不成立ニ終ツタカ、露國當時ノ飽クナキ慾望ノ一端ハ之レニ依リテ知ル事カ出來ルト思フ。韓非子ノ言ヲ借リテ言ヘハ、今日一城ヲ割キ、明日亦一城ヲ割ク、大露ノ慾飽ク無クシテ滿韓ノ地ニ限リ在リ、當時ノ狀況ノ實寫ハ正ニ此通りテアル。

露軍ノ奉天再占領

滿韓ニ於ケル形勢斯クノ如クナル時、明治三十六年十月二十八日露國ノ第十五聯隊ハ七百八十名ノ軍隊編成テ突如奉天城内ニ入り直チニ城門ノ守備ニ就イク、是ハ其月八日上海テ我國及米國カ清國ト通商追加條約

ヲ結ヒ、奉天ノ開市ヲ協定シタ爲、之レニ反對ノ「アレキシエフ」總督カ同市ノ再占領ヲ命シ、未タ清國ノ權内ニ復歸シ居ラヌ同市ノコトヲ清國カ約束スル權限ハナイト主張スル爲ノ魂膽タト思ハレルカ、翌日「アレキシエフ」總督ハ重要案件協議ノ爲ト稱シ會見ヲ盛京將軍ニ申込シタ。清國中央政府ハ將軍ニ電報シテ此申込ニ應スルノヲ拒絕セヨト命令シ、同時ニ在露清國公使ニ打電シテ、外交上ノ交渉ハ總テ相互ノ外交代表者間ニ爲サルヘキモノト清國政府ハ思考スル旨ヲ露國政府ニ通告サセタト聞イテ居ル。

露國對案ニ對スル我修正案

帝國政府ハ明治三十六年十月三日ニ提出サレタ露國ノ對案ヲ其後慎重ニ研究シタカ、之レハ專ラ韓國ニ關スルモノテ、而カモ同國ニ於ケル我自由行動權ヲ頗ル制限シ、殊ニ甚タシキハ北緯三十九度以北即チ韓國ノ約三分ノ一ヲ中立地帶トスルニ拘ラス、滿洲ニ關シテハ絕對ニ之レヲ日本ノ利益範圍外ト認メンコトヲ要求スル外、何ノ取極ヲモ豫見セヌモノテ、第一衡平ヲ缺クノミナラス、我國カ協商締結ノ爲露國ト交渉ヲ開始シタ趣旨ト甚タシキ開キカアルカラ、小村外相ハ數回「ローゼン」公使ト會見シテ反覆論難ノ末、十月三十日左ノ如キ修正案ヲ提出シタ。

第一條 清韓兩國ノ獨立及領土保全ヲ尊重スルコトヲ相互ニ約スルコト。

第二條 露國ハ韓國ニ於ケル日本ノ優越ナル利益ヲ承認シ、並ニ韓國ノ行政ヲ改良スヘキ助言援助（但シ軍事上ノ援助ヲ含ム）ヲ同國ニ與フルハ日本ノ權利タルコトヲ承認スルコト。

第三條 韓國ニ於ケル日本ノ商業的及工業的活動ノ發達ヲ阻礙セサルヘキコト、及此等利益ヲ保護スルカ爲ニ取ラルヘキ總テノ措置ニ反對セサルヘキコトヲ露國ニ於テ約スルコト。

第四條 前條ニ掲ケタル目的又ハ國際紛爭ヲ起スヘキ叛亂若クハ騷擾ヲ鎮定スルノ目的ヲ以テ、韓國ニ軍隊ヲ送遣スルハ日本ノ權利タルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト。

第五條 朝鮮海峽ノ自由航行ヲ迫害シ得ヘキ兵要工事ヲ韓國沿岸ニ設ケサルヘキコトヲ日本ニ於テ約スルコト。

第六條 韓國ト滿洲トノ境界ニ於テ其兩側五十吉米ニ跨リ一ノ中立地帶ヲ設定シ、右地帶内ニハ締約國孰レモ相互ノ承諾ナクシテ軍隊ヲ引入レサルヘキコトヲ相互ニ約スコト。

第七條 滿洲ハ日本ノ特殊利益ノ範圍外ニ在ルコトヲ日本ニ於テ承認シ、韓國ハ露國ノ特殊利益ノ範圍外ニ在ルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト。

第八條 日本ハ滿洲ニ於ケル露國ノ特殊利益ヲ承認シ、並ニ此等利益ヲ保護スルカ爲ニ必要ナル措置ヲ取ルハ露國ノ權利タルコトヲ承認スルコト。

第九條 韓國トノ條約ニ因リ露國ニ屬スル商業上及居住上ノ權利及免除ヲ妨礙セサルヘキコトヲ日本ニ於テ約スルコト、並ニ清國トノ條約ニ因リテ日本ニ屬スル商業上及居住上ノ權利及免除ヲ妨礙セサルヘキコトヲ露國ニ於テ約スルコト。

第十條 今後韓國鐵道及東清鐵道ニシテ鴨綠江迄延長セラルルニ至ラハ、該兩鐵道ノ連結ヲ阻害セサルヘ

キコトヲ相互ニ約スルコト。

第十一條 本協約ハ從前韓國ニ關シテ日露兩國ノ間ニ結ハレタル總テノ協定ニ代ハルヘキコト。

日本ノ要求基幹ト露國ノ對日觀

露國ノ對案ト我修正案トヲ對比スレハ、帝國政府ノ主張カ奈邊ニ在ルカハ容易ニ了解出來ルト思フカ、蛇足ヲ顧ミス之レヲ指摘スレハ、我國トシテ滿洲ニ於ケル其既得權ヲ露國ニ承認サセル必要ノ在ルコトハ云フ迄モ無イコトテ、之レト同時ニ非常ナ肝要事ハ同地ニ對スル清國ノ主權ト領土保全トヲ露國ヲシテ明確ニ尊重サセルニアル。若シ此要求ヲ貫徹スルコトカ出來ナケレハ、我國カ露國ト協定ヲ結フノハ全ク無意義テ又我國カラ云ヘハ清國ノ獨立及領土保全尊重ノ承認要求ハ、單ニ露國カ業已ニ任意ニ與ヘタ聲明ノ確認ヲ求ムルニ外ナラヌノタカラ、露國ノ意圖ヲ忖度スレハ之レカ拒絕ハ如何ナル結果ヲ包藏スルカ、從ツテ次テ來ルヘキ韓國ニ對スル脅威カ如何ナルモノテアルカハ、容易ニ豫見シ得ヘキ事柄故、如何ニシテモ露國ノ主張ニ聽從スルコトハ出來ヌ。更ニ韓國ニ於ケル我絕對ノ優越權ヲ認メサセル事カ、本協定締結ノ一要目テ在ル以上、韓國ヘ出兵ノ際豫メ露國ニ通知スル義務ヲ負フ事ヤ、韓國領土ヲ軍略上ノ目的ニ使用セヌ約束ヲスルコトヤ、片務的ニ韓國領土内ニ立地帶ヲ設クル事ノ如キハ、我國トシテ斷シテ承諾シ能ハヌ所テ、此基本的條理ヲ露國カ理解スルヲ欲セヌ限リ交渉ノ纏マル望ハ全ク無イノテアル。露國テモ外務大臣初メ外務省ノ意嚮乃至「ローゼン」公使ノ考ヘハ相當穩健テ、妥協ノ成立ヲ希望シテ居タ様テアルカ、武斷派ハ益々勢力

ヲ伸ハシ、皇族亦其渦中ニ投シ、遂ニ意思薄弱ナ「ツアー」ヲ藥籠中ノモノトナシタ結果、「ラムスドルフ」伯ヤ「ウキツテ」氏等ノ意見ハ殆ント聽カレナカッタ様ニ見受ケラレル、ソシテ武斷派カ飽迄其慾望ヲ遂ケントシテ策動ヲ敢テシタノハ、戰爭シテモ容易ニ日本ヲ撃チ敗ル事カ出來ルト考ヘテ居タ爲モアツタダロウカ夫レヨリモ日本ノ強硬ナ態度ハ一種ノ虛喝ニ過キヌ、最後ノ瞬間ニハ必ス讓歩スルト誤斷シタ結果テ、此事ハ嘗テ三國干涉當時我國カラ遼東還附ノ對價トシテ五千萬兩ノ要求ヲシタ時、獨逸ニ駐劄スル露國大使カ獨逸外務次官ニ對シ、又「ロバノフ」外相カ在露獨逸大使ニ對シ、由來亞細亞人ハ掛ケ値ヲ云フ癖カアルカラ日本政府ト交渉スル場合ニモ先ツ此心理狀態ニ留意スルノカ肝要タト云フタノト同様、露國ノ武斷派モ矢張り此種ノ錯覺ヲ懷テ居タノタト思フ。

我修正案ニ對スル露國ノ修正對案

ソハ兎モ角トシテ我修正案ニ對スル露國外務省ノ態度ハ一向ニ煮エ切ラヌ、之レハ無理モ無イコトテ一々「アレキシエフ」總督ノ意見ヲ聞カナケレハナラス、其照覆等テ手間取ル内ニ、我國論ハ益々沸騰スル一方タカラ、小村外務大臣ハ何回モ露國ニ回答ヲ督促シ、十二月十一日漸ク「ローゼン」公使カラ左ノ修正對案カ提出サレタ。

第一條 韓國ノ獨立並ニ領土保全ヲ尊重スルコトヲ相互ニ約スルコト。

第二條 露國ハ韓國ニ於ケル日本ノ優越ナル利益ヲ承認シ、並ニ民政ヲ改良スヘキ助言ヲ以テ韓國ヲ援助

スルハ日本ノ權利タルヲ承認スルコト。

第三條 韓國ニ於ケル日本ノ工業的及商業的活動ノ發達ニ反對セサルヘキコト、並ニ此等ノ利益ヲ保護スルカ爲措置ヲ執ルコトニ反對セサルヘキコトヲ露國ニ於テ約スルコト。

第四條 前條ニ掲ケタル目的又ハ國際紛爭ヲ起シ得ヘキ叛亂若ハ騷擾ヲ鎮定スルノ目的ヲ以テ韓國ニ軍隊ヲ送遣スルハ、日本ノ權利タルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト。

第五條 韓國領土ノ一部タリトモ軍略上ノ目的ニ使用セサルコト、及朝鮮海峽ノ自由航行ヲ迫害シ得ヘキ兵要工事ヲ韓國沿岸ニ設ケサルヘキコト。

第六條 韓國領土ニシテ北緯三十九度以北ニ在ル部分ハ中立地帯ト看做シ、兩締約國孰レモ之レニ軍隊ヲ引入レサルヘキコトヲ相互ニ約スルコト。

第七條 韓國鐵道及東清鐵道ニシテ鴨綠江迄延長スルニ至ラハ、該兩鐵道ノ連絡ヲ阻礙セサルヘキコトヲ相互ニ約スルコト。

第八條 韓國ニ關シ從前日露兩國間ニ結ハレタル總テノ協定ヲ廢止スルコト。

之ニ對スル我要求

此修正對案ハ多少我主張ヲ容レタ所モ在ルカ、又露國ノ原案ヨリ改惡サレタ個所モ少ナクナイ。併シ我國ノ見テ以テ根幹トスル要綱ニ付テハ毫末モ妥協ノ色ヲ示ササルノミナラス、今回ハ滿洲ニ關スル條項ヲ全然

削除シ、之レヲ協定ノ範圍外ニシテ居ルノタカラ、我國トシテ到底承諾ノ餘地ハ無イ。蓋シ露國ノ云ヒ分テハ滿洲ハ露國カ一旦征服ノ權利ニ依テ占領シタ土地テアルニモ拘ラス、之レヲ清國ニ還附セントスルノタカラ、同地ニ於ケル露國ノ莫大ナ利益ヲ安固ニスル爲、或種ノ保障ヲ求メルノハ勿論ノ事テ、清國カ此ノ保障ヲ與ヘルノヲ拒ミツツアル今日、露清間專屬ノ案件タル滿洲問題ニ關シテ、第三國トノ間ニ協定ヲスルコトハ露國ニ取り不可能事タト云フ筆鋒テ、栗野公使モ十二月十六日「ラムズドルフ」伯ト會見後、露國ハ清國以外ノ如何ナル國トモ滿洲問題ヲ協議セヌト決心シタコトカ觀取サレルカラ、露國ト満足ノ協定ニ達スル望ハ全ク絶ヘタト報告シテ居ル。然シ我國ハ飽迄平和的解決ノ道途ヲ辿リ、十二月二十一日露國ノ修正案ニ對シテ、第二條「民政」ヲ「行政」ニ「助言ヲ以テ援助スルコト」ヲ「助言及援助ヲ與フルコト」ニ改メ、第五條ノ前半ト第六條全部ヲ削除センコトヲ要求シ、同時ニ滿洲ニ關スル案件ニ付露國ノ再考ヲ求メタ。帝國政府カ第六條ノ全文削除ヲ提議シタ所以ハ、露國ニ於テ滿韓境界兩側ニ跨リ同一ノ距離間ヲ中立地帯ニスルノニ同意セヌ以上、中立地帯ハ寧ロ之レヲ全廢スルヲ適當ト認メタカラタ。